

論 文

K・L・ウォルトンの描写の理論： R・ウォルハイムとの論争を手がかりに

清 塚 邦 彦

K・L・ウォルトンは分析美学を代表する理論家の一人であり、とりわけ、ごっこ遊び（メイクビリーブ）の概念に依拠して各種の芸術作品をカバーする表象の一般理論（それはまたフィクションの理論とも呼ばれる）を構想した人物として知られる。本稿では、その一般理論の中から、特に画像表象（pictorial representation, 絵による再現）の本性に関わる部分に焦点を絞り、検討を行う。

ウォルトンは、論文「ごっこ遊びと諸芸術」（1997年）¹の中で、自らの描写理論の展開を、分析美学の進展と関連付けて解説している。そこでの説明では、ウォルトン理論は、E・H・ゴンブリッチの問題提起を継承しつつ、R・ウォルハイムの理論を補完し、さらに発展させる理論なのだとされる。しかし、果たしてウォルトンの理論は想定されている役回りを想定通りに果たせるのかどうか。その見極めが本稿の課題である。

この課題と取り組むための手がかりとして、本稿では、ウォルトンと晩年のウォルハイムの間で交わされた論争に注目する。論争は多分に行き違いの観を呈しているが、両者が取り組んでいった問題の所在を見極める上では貴重な手がかりになるはずである。

以下、第1節から第3節では、ゴンブリッチとウォルハイムとの比較を通じ、ウォルトンの描写理論上の位置づけとその基本的論点について確認を行う。第4節から第6節では、ウォルトンの理論に対してウォルハイムの側から寄せられた批判を取り上げ、検討を行う。第7節は、ウォルハイムからの批判も踏まえウォルトン理論についてより踏み込んだ分析を行う。以上を通じて絵を見る経験の特異性への理論的展望を明らかにすることが本稿の最終目的である²。

1 ゴンブリッチの着想

ゴンブリッチの画像表象論と言うと、何より主著『芸術と幻影』（1960年）³が取り沙汰される

1 Walton (1997).

2 ウォルトンに対するウォルハイムの批判についての論評として、清塚 (2010) を参照。本稿は、ウォルトン流の理論を支持するというそこでの方向性を維持しつつ、個々の具体的な論点についてより掘り下げた視点からの吟味を試みるものである。

3 Gombrich (1960).

のが通例だが、ウォルトンが自説との関連で注目しているのはむしろ、主著に先立って発表された論文「棒馬考」(1950年初出)⁴での議論である。棒馬とは、棒の先端に馬の頭部のような簡単な飾りのついた遊具であるとされ、子供はそれにまたがりながら、馬に乗っているかのようなごっこ遊びにふけるのだという(私たちにも身近な竹馬はその親戚筋に当たる)。これは絵を論ずるのにはやや特異な着眼点だが、あえてこの事例を典型に見立てた上で、絵や彫刻などの造形芸術における表象の特質を論じようというのが、「棒馬考」におけるゴンブリッチの野心的な試みである。その中で、図式的に整理すれば、ゴンブリッチは、絵や彫刻による表象の本性に関する三通りの見解を対比し、その二つを批判し、残る一つを弁護する。

退けられる見解の一つは、絵による表象を、絵による対象の外形の模倣に基づくものとみなすものである。絵はその描く対象の似姿だというふうに言い換えてもよい。これは、しばしば類似説と呼ばれる見解である。

退けられる見解のもう一つは、絵による表象を、言葉による表象(表示)に準えるものである。絵は、言葉がそうするように、一定の概念内容を意味、指示、表示するのだというふうに。後知恵を交えて言えば、この種の発想の発展形態に当たるのがネルソン・グッドマンの記号論的な理論である。

ゴンブリッチがこれらの見解と対置するのは、絵や彫刻を、主題対象の似姿や表示でなく、一つの「創造」として捉える見解である。ゴンブリッチによれば、棒馬や積み木で遊ぶ子供たちは、馬や列車を、真似るのでも指示するのでもなく、作るのだという。そのさい、「作る」ことの実質と考えられているのは、棒や積み木が、端的に「馬(おうま)」や「列車(デンシャ、キシヤポッポ)」と呼ばれ、それら自身が馬や列車の一例として遇される(時には、お気に入りとして愛称を与えられたりする)という事実である⁵。そして、同じような事情は絵や彫刻の場合も成り立つというのが、ゴンブリッチの着想である。

もちろん、棒馬や積み木や絵は、文字通りの意味で馬や列車であるわけではない。ゴンブリッチは、現実の対象と表象の間の落差を言い表す言葉として、「代理(substitute)」という言い方をしている。「棒馬は馬の代わりであり、人の絵は人の代わりである」⁶。

しかし、ではそれらに実物の代理としての性格を与え、さらには表象としての身分を与えるものは、何なのか。ゴンブリッチによれば、それは「機能(function)」であり、それらが様々な実物の機能の一部を代行することである。棒が馬の代理となるのは、それが、子供がそれにまたがって乗馬遊びを演じ得る限りで、馬が果たす機能の一部を果たすからである。ゴンブリッチの見解では、こうした代理として働く機能を担うという点こそが、棒馬が馬の表象となるうえで本質的

4 Gombrich (1963).

5 Gombrich (1963), p. 2 [邦訳書11頁]. ゴンブリッチは、「創造であって模倣ではない」(Gombrich (1963), p. 3)と述べている。

6 Walton (1997), p. 288.

な特徴である。「外形よりも機能である」⁷とゴンブリッチは述べている。

さて、ウォルトンは、こうしたゴンブリッチの議論の展開をおおむね好意的に紹介しているが、同時に、それを単純には是認できないことも確認している。

第一に、ゴンブリッチは、棒馬は馬とは顕著な類似性を持たないにも関わらず、馬の表象だという点を力説している。たしかに、それは真相の一端を突いた指摘かもしれない。しかし、はたしてその場合の表象が、絵による表象 (pictorial representation) だと言えるのかどうかには疑問が残る。むしろ、類似性の欠如は、この場合の表象が別の種類の表象であると考えべき理由だと考えたほうが自然なのではないか⁸。

また第二に、ゴンブリッチは、棒馬が馬を表象するための拠り所として、棒馬が馬の「機能」を代理するという事実を力説している。しかし、本当のところを言えば、棒馬は、馬が果たす機能の多くを果たしてはいない。「棒馬には本当のところは乗ることができない。だからそれは実物の馬の代理には本当のところはなれない」⁹。

こうして、ウォルトンは、ゴンブリッチの理論がそのままの形では受け入れがたいことを確認する。しかし、同時にウォルトンは、そこに含まれる重要な着眼点には、敬意を払っている。それは、棒馬を前に私たちが「馬」と語るという事実である。私たちは現実の馬のことを「馬」と呼ぶけれども、「馬」という言葉自体を「馬」と呼ぶことはない。しかし、馬の絵は、馬の概念や現実の馬を表示するばかりではなく、それ自身が馬と呼ばれ、さらにさまざまな性質を帰され、時には愛称を与えられたりもする。こうした事実に画像表象の本性を探る貴重な糸口を見る点では、ウォルトンはゴンブリッチに賛同している。そして、ウォルトンの考えでは、その糸口に沿って画像表象の理論を展開する助けとなるのが、彼のごっこ遊びの理論である。

先ほどの棒馬遊びを例に取ろう¹⁰。この場合、一方では、子供が棒にまたがって走り回ったり声を張り上げたりする、という現実の行為が行われ、他方では、自分 (子供たち自身) が実際に馬にまたがって走り回っているかのような想像が行われている。しかも、これら二通りの経験は、単に同時併存するだけではなく、内的なつながりを持っている。つまり、子どもたちは、棒にまたがって走り回ったり叫んだりする行為を行いつつ、それらの行為を行うことがすなわち、現実的に馬を操って走り回っていることであるかのように想像しているのである。この場合、ごっこ遊びを成り立たせているのは、現実に行われている行為が、現実には行われていない行為と想像の中で同一視される、という構図である。そのようなごっこ遊びが人々の間で共有されている限り、その遊びに従事するサークル内では、棒馬はまさに「馬」であり、棒にまたがる私は「馬を乗り回している」と言える。

ウォルトンの理論では、これと同様のごっこ遊び的な想像が、絵を見る経験においても働いて

7 Gombrich (1963), p. 4 [邦訳書14頁].

8 Walton (1997), p. 289.

9 Walton (1997), p. 290. 傍点は原著のイタリック体を示す。

10 Walton (1997), p. 290.

いる¹¹。それは、一方では、絵の平坦な表面のもつ形状を見る経験であると同時に、人の風貌なり静物なり風景なりといった多様な主題対象を見ているかのように想像する経験でもある。これら二つの経験は単に同時に併存しているのではなく、内的なつながりを持っている。つまり、絵を見る人は、絵の平坦な表面を見ながら、同時に、その平坦な表面を見る経験がすなわち、一定の風貌の人物を見る経験であるかのように想像している。そのようなごっこ遊び的な想像に従事している人々のサークル内では、現実には絵を見ていながら、それとは異なる多様な人物や事物の姿を見ていることが虚構的に真であると見なされる。絵は、そうした視覚的ごっこ遊びのための社会的に共有された小道具として位置付けられる。

以上のようなウォルトンの考察は、ゴンブリッチの議論の限界を確認しつつも、そこに見られる洞察の萌芽を、ごっこ遊びの理論を通じて明らかにしたものだと言える。

2 ウォルハイムと絵の視覚性

ウォルトンがゴンブリッチから引き継いだのが、表象の起源をごっこ遊び的な想像に求める着想だったとすると、彼がウォルハイムから引き継ごうとしているのは、絵を見る経験が、単に想像にとどまらず、見ること、知覚経験だという事実である。

絵を見ることは、単に平面を見ることではなく、その平面のもとに多様な事物の姿を見ることでもある。例えば人物画を見ることは、画用紙や画布の表面の線描や彩色の平面的配置を見ることにとどまらず、ある独特の風貌の人の姿を見ることでもある。後者の意味での「見る」は、実際にはそこに人物などいないことを考えれば、眼前の対象を見ると言われる場合の通常の「見る」とは大きく異なっている。それは、紙や布の表面を見ていながら同時に不在の対象を見るという独特の知覚経験である。そこには、一方では、紙や板の平らな表面を見る経験でありながら、同時に、その描写内容に該当する多様な事物や人物の姿を見る経験でもある、という独特な二重構造が見られる。ウォルハイムはそれを「二重性 (twofoldness)」と呼び、そうした二重性をもった知覚経験を、「の中に見ること (seeing-in)」と呼んだ¹²。ウォルハイムの理論では、絵が何かを描写するという画像表象の働きを支えているのは、こうした二重性を帯びた知覚に他ならない。

絵を見る経験の二重性という論点の趣旨について、ウォルハイムの議論には時期によって動揺も見られる¹³のだが、最終的には¹⁴、彼は、平面の知覚と主題対象の知覚という二重の側面が、単に二つの別個の経験として共存するのではなく、単一の経験の不可分の二側面をなしていることを力説する。ウォルハイムはそれらの側面をそれぞれ「形状的 (configurational) な側面」と「認

11 Walton (1997), p. 290.

12 Cf. Wollheim (1987), p. 46 ほか。

13 詳しくは清塚 (2021) を参照。

14 具体的には、1980年代後半期以後を指す。Cf. Wollheim (1987), ch. II.

知的 (recognitionnal) な側面」と呼んでいる¹⁵。大まかに言えば、前者は平面を見る経験、後者は主題対象を見る経験に該当するが、それらは決して別個な二つの経験ではなく、その全体が「の中に見ること」という単一不可分の経験を織りなしているというのである。

さて、絵を見る経験の特性を独特な二重性に求めるウォルハイムの立論は、分析美学においてその重要性が広く知られ一方で、委細については異論も多く、特に、単に二重性を指摘するだけでは当該経験の分析として物足りないという点は問題視されてきた¹⁶。その点はウォルトンも共通である。彼は、絵の知覚には特殊な知覚が介在するという論点には賛同し、それを「の中に見ること」と呼ぶことにも賛同するが、その知覚経験の特徴づけに関して、たんに二重性と単一性を指摘するだけでは不十分だと主張する¹⁷。主著の Walton (1990) では、「ウォルハイムは『の中に見ること』が結局どうということなのかを十分に説明していない」¹⁸、と言われ、その実質が視覚的なごっこ遊びにあるとの提案が行われている。

人が犬をある模様の中に見るとき、その人はいったい何をしているのか。その人は、視覚的なごっこ遊びに参加しているのである¹⁹。

ここに言われる「視覚的なごっこ遊び」の概略にはすでに触れた。それは絵の表面の形状を見る経験をきっかけとしつつ、それを見る経験が絵の主題対象を見る経験であるかのように想像する、という知覚と想像が浸透しあった経験である。この種の知覚的・想像的な経験に準拠すれば、ウォルハイムが力説した「二重性」についても、また二重性を備えた複合的な経験の「単一性」という点についても、その本性と由来をよりよく理解することができる、とウォルトンは考えたのである。

しかし不幸にして、こうしたウォルトンの提案は、ウォルハイムが受け入れる所とはならなかった。ウォルハイムは、ウォルトンについて明言的に論評したいくつかの箇所において、一貫してその提案を批判している。その一番の要点は、ウォルトン流の視覚的なごっこ遊びの理論が、絵の主題対象を「見る」という独特な知覚経験 (の中に見ること) の存在を説明できていないというものである。以下では、両者の食い違いについてもう少し踏み込んで検討してみることで、絵を見る知覚の本性をめぐる問題状況を明らかにしたい。しかし、そのためにはまず、ウォルトンの言う「視覚的なごっこ遊び」の実質について、本人の発言も踏まえもう少し丁寧に整理しておかなければならない。

15 Wollheim (2001), p. 20.

16 例えば Van Gerben (2001) の第一部に収録の諸論文を参照。

17 Walton (2008c), p. 135 : 「《の中に見ること》は決して、そこに二重性という現象の性格が伴うという指摘だけでは説明できない」。

18 Walton (1990), p. 300 [邦訳書301].

19 Walton (1990), p. 300 [邦訳書301].

3 ウォルトン：視覚的ごっこ遊び

本節では、ウォルトンがウォルハイム理論について論評する際の拠り所としている「視覚的ごっこ遊び」の概念について、本人の叙述に即して確認を行う。ちなみに、この論争に臨んでウォルトンが自説の表明箇所として挙げているのは次の4つの箇所である²⁰。

- (i) 著書『ごっこ遊びとしてのミメーシス』, 1990年。(Walton (1990))
- (ii) 論文「の中に見ることと虚構的に見ること」, 1992年。(Walton (2008a) に再録)
- (iii) 論文「絵と写真について」, 1997年 (Walton (2008a) に再録)
- (iv) 論文「描写と知覚と想像」, 2002年 (Walton (2008a) に再録)

これらの箇所での論旨は、細かい言い回しの違いを除けばおおむね共通している。ここでは、一連の論点が最もコンパクトに網羅されている論文「ごっこ遊びと諸芸術」(Walton (1997))での説明に準拠しながら、上記4点に照らして随時補足することとしたい。

「ごっこ遊びと諸芸術」でも、先に触れた Walton (1990) での議論の流れと同様、ウォルトンは、ウォルハイムの知覚説には賛同の意を表し、「の中に見ること」という呼び名にも賛同する一方で、「知覚することと想像することの本性と両者の関係についてはもっと言葉を費やす必要がある」²¹、と述べてウォルハイムの説明の不十分さへの不満を表明しており、さらに以下のような記述を与えている。(傍点は原著のイタリック体を示す。(1) から (6) のナンバリングは筆者の補足。)

(1) 絵の中に馬を見ることは、実際には絵を見ていながら、馬を想像することであり、馬を見てい[・]る[・]という想像をすることである。(2) さらに、見る人は、その人が実際に絵を見てい[・]る[・]という経験が、その人が馬を見てい[・]る[・]という行為であると想像する。(3) 見てい[・]る[・]という想像をすることは、見てい[・]る[・]こと[・]の想像にとどまらず、「第一人称的」に想像することである。(4) それはまた「内からの」想像である。さらに、(5) 鑑賞者の想像は思案によるもの (deliberate) ではなく、画布の上のマークに対する自動的な反応であることを付け加えるべきだろう。鑑賞者は、絵に目を向けるとき、気が付くと、馬を見てい[・]る[・]という想像をしているのであり、自分の実際の知覚経験が馬を見る経験であると想像しているのである。……

最後に、(6) 絵を見る人は、絵を見てい[・]る[・]こと[・]に加えて[・]自[・]ず[・]と[・]上[・]記[・]の[・]よ[・]う[・]な[・]想[・]像[・]を[・]行[・]っ[・]て[・]い[・]る[・]と[・]見[・]な[・]さ[・]れ[・]る[・]べ[・]き[・]で[・]は[・]な[・]く[・]、[・]知[・]覚[・]的[・]で[・]あ[・]る[・]と[・]同[・]時[・]に[・]想[・]像[・]的[・]で[・]あ[・]る[・]単[・]一[・]の[・]経[・]験[・]を[・]し[・]て

²⁰ Cf. Walton (2008d), p.143, n.1.

²¹ Walton (1997), p. 292.

いと見なされるべきである。その人による絵の知覚は想像に彩られているのである。……²²

以上の一連の論点について、以下、補足的な解説を加える。

論点(1)は、絵を見る経験において知覚と想像が共存しているという事態の、まずは大まかな確認である。しかし、共存の正確な形までは、(1)ではまだ特定されていない。

この点についてまず思い浮かぶ見方は、絵(例えば馬の)を見る経験においては、絵の表面の平面的形状を見る経験と、主題対象(馬)についての想像とが共存する、というものである。これは正しい見方だが、しかし、絵を見る経験の特徴づけとしては緩すぎる。なぜなら、例えば馬についての記述を含む小説の文面を読むときにも、私たちは、紙面の平面的な形状を見ながら、同時に馬について想像しているからである²³。

もう一つの見方は、絵を見る経験においては、絵の表面の平面的形状を見る経験と、主題対象(例えば馬)を見る経験についての想像とが共存する、というものである。これもまた、絵を見る経験についての真理の一つだが、しかし、先と同様、絵を見る経験の特徴づけとしては緩すぎる。先と同様、馬についての記述(とりわけ、作中人物が馬を見ている場面を含む)を読むときにも、この種の知覚と想像とが共存するからである²⁴。

こうした不十分さを補うものとして登場するのが、次の論点(2)である。それによれば、絵を見る経験においては、絵の表面の平面的形状を見る知覚経験が、主題対象(例えば馬)を見るというそれとは異なる知覚経験であるかのように想像される。子供の遊びにおいて、積み木を積む行為が家を建てる行為であるかのように想像されるのと同じように、絵を小道具としたごっこ遊びでは、現実には絵画平面を見る経験が、そこには不在の主題対象を見る経験であるかのように想像される、というわけである。

ウォルトンの理解では、この種の視覚的なごっこ遊びはまた、ウォルハイムの言う「の中に見る」経験の本質的特徴である「二重性」に説明を与えるものでもある。つまり、平面を見ながら、それを主題対象を見ることとして想像するというごっこ遊びの構造こそが二重性の由来だということである。彼は述べている。

二重性の実質は、単に、絵が視覚的なごっこ遊びの小道具として用いられていることにある。人は自分が水車小屋[主題対象]を見ていると想像するのだが、そうするのは、人が画布上のそれと関連する特徴に気付くからなのである²⁵。

続く(3)～(6)は、この視覚的なごっこ遊びの特徴に関する補足説明に当たる。

22 Walton (1997), p. 292.

23 Walton (2008c), pp. 136-137.

24 Walton (1990), pp. 293-295 [邦訳294-6頁].

25 Walton (1990), p. 301 [邦訳書301頁]. []内は筆者の補足。

(3)と(4)は、いまの場合の想像が、単に第三者的な視点からの命題的想像ではなく、自分が自らの体験として主題対象を見ていることの想像だという点の確認である。例えば、赤い色片を見ながら、単に誰かがこの経験を椿の花を見る経験だと想像するかもしれないと思うというのではなく、色片を見ている私が、その経験を、椿の花をいま私が見ている経験であるかのように想像する、ということである。

以上の(1)から(4)はごっこ遊び的な想像を構成している要素経験の内訳や性格に関わっているが、続く(5)と(6)は、それらを単一の経験へと統合している要因に関わる。それらは、ウォルハイムの理論の中で力説されていた、「中に見る」経験の「単一性」という論点と密接に関連している。

(5)は、絵画平面を見る経験と、それが主題対象の様子を見ることだという想像との間の関係に関わる。もしもこの場合の想像を、この言葉が示唆しがちな恣意的な連想のような意味にとるならば、絵を見る経験は、平面に目を向けたのちに展開される自由な想像の赴くままでのような事物を見る経験でもありうることになると思われる²⁶。しかし、ウォルトンも指摘するように、事実はそうではない。絵を見る経験に関与するごっこ遊び的な想像は、見る人の恣意的な選択によって随意に成立するのではなく、むしろ絵の表面に目を向けることに対する「自動的な反応 (spontaneous response)」²⁷として成立する。私たちは、例えば人物画を見るときには、その絵画平面に目を向けたとたん、気がつくと人物を見ているかのような想像にふけているのであり、しかも、当の絵画平面を見ることがすなわち当該人物の顔を見ることであるかのような想像にふけているのである。この場合の想像は、随意的な選択の所産ではなく、絵の表面を見る経験との緊密な因果関係の所産である。

この論点との関連で、ウォルトンは、想像を気まぐれなもの、「主体が制御できる随意的な行為」と決めつけるような通念が間違いであることを指摘している。「夢は明白な反例であり、白昼夢を構成する想像の多くもそうである」²⁸。が、それ以上に、当面の文脈で重要なのは、絵を小道具にした視覚的なごっこ遊びにおいて、想像される内容が、絵の表面を見る経験、ひいてはその形状そのものによって、因果的に制約されているという点である²⁹。それは、想像という言葉から連想されがちな随意的な選択や気まぐれの所産ではない。

最後の(6)は、(5)の指摘する因果関係によって統合された知覚と想像が、知覚的であると同時に想像的でもある単一の複合的経験を構成することを指摘するものである。この論点は、

26 実際、ウォルトンにはそのような批判が寄せられてきた。Cf. Schier (1986), p. 23.

27 Walton (1997), p. 292. Cf. Walton (2008c), p. 137. さらに同書 p. 118では「絵を知覚した結果として、程度の差はあれ自動的 (automatically) に想像する」と言われている。

28 Walton (1997), p. 292. Cf. Walton (2008b), p. 118; (2008c), p. 137.

29 より正確に言えば、ここでは、想像の二重の意味での非指定性が問題になっていることに留意すべきである。第一は、ごっこ遊びにおける想像が、一般にごっこ遊びの規則 (生成原理) によって指定されていることであり、第二は、本文中でも述べたような、絵を見る経験への因果的な依存性を基盤とする被指定性である。後者は、ごっこ遊び一般の特性ではなく、視覚的な (あるいはより広く知覚的な) ごっこ遊びの特性に当たる。

ウォルハイムが「の中に見る」経験の特質として力説した「単一性」という論点に対する、ウォルトン流の説明に当たる。ウォルハイムが主張した「単一性」というのは、絵を見る経験が、絵の表面を見る経験と主題対象を見る経験というそれぞれ別個な経験の偶然的な共存の産物ではなく、絵の表面と主題対象のそれぞれに関わる二つの側面を持った単一の経験だということである³⁰。これについてウォルトンは次のように述べている。

これら〔画布の表面と主題対象〕が単一の経験の不可分の側面であるということの意味は、見ることと想像することの相互浸透によって与えられる。……人は、画布を現実に見る結果として、……その画布を見ることが水車小屋を見ていることであると想像するのだが、この想像活動は、当の画布を見る経験を構成する一部分となるのである³¹。

先ほどの論文「ごっこ遊びと諸芸術」からの引用にある「絵の知覚が想像に彩られる」という事態が、ここにいう「相互浸透」と重なることは言うまでもない³²。

以上、(1)～(6)に沿ってウォルトンの視覚のごっこ遊びの概要を見てきたが、最後にもう一点、重要事項の確認が必要である。(1)～(6)はいずれも絵を見ている各個人の内面における経験の記述であるが、それらが「視覚的なごっこ遊び」という概念で括られるのは、前提として、これらの経験がプライベートな事実の問題ではなく、一定の社会的な広がりを持って共有された活動だという認識による。現実には絵の表面を見ていながら、あたかも例えば馬を見ているかのように想像する視覚的なごっこ遊びが一定の社会的広がりをもつ限りで、そこで想像されている内容は絵の表象内容を支える虚構的な真理³³としての身分を手に入れる。そのような想像の文脈では、私たちは馬を見ているのであり、絵を指さして例えば「馬だ」と言うことが真となる（ただし虚構的な意味で）。ウォルトンによれば、絵とは、こうした共同的なごっこ遊びの中で、多様な虚構の真理を生成するための一種の公共財であり、ごっこ遊びの「小道具」である³⁴。

ウォルトン理論に関する以上の概説を踏まえ、次に、ウォルハイムの見解を検討する。

30 Wollheim (1987), p.46.

31 Walton (1990), p. 301 [邦訳書301頁]. []内は筆者の補足。

32 ウォルトンは、この論点(6)を、知覚に信念、思考、期待、態度、欲求等が浸透するという——近年では知覚の「認知的な侵入可能性」と呼ばれる——一般的な現象の特殊事例に当たるものと考えている。Cf. Walton (1990), p. 295 [邦訳書295-6頁].

33 「虚構的な真理」の概念については Walton (1990) の第 I 部を参照。邦語での解説としては清塚 (2017) 第5章を参照。

34 「絵は、いくつかの重要な側面で視覚的であるようなごっこ遊びの小道具である…」(Walton (1990), p. 293 [邦訳書294頁]), 「描写 depiction であるとは、この種の視覚的なごっこ遊びにおいて、小道具として役立てられるという機能を持つことである」(Walton (1990), p. 293 [邦訳書294頁]), 「描写であるとは、…視覚的なごっこ遊びの小道具として用いられる機能を持つということ」(Walton (1990), p. 296 [邦訳書296頁])。

4 ウォルハイムからの批判（I）

ウォルトン流のごっこ遊び理論に対するウォルハイムの姿勢が明言的に表明されているのは、次の三つの箇所である³⁵。

（I）著書『芸術としての絵画』，1987年。

（II）論文「画像表象について」。1996年に口頭で発表され，1998年に雑誌に発表，2001年に著書に収録。

（III）論文「絵に視覚性を与えるものは何か」，2003年。

どの箇所でも，ウォルトンの論評に当てられた紙幅自体は大きなものではなく，半頁弱から長くて2頁をやや上回る程度である。しかし，最晩年の（III）では割かれる紙幅も増加し，ウォルトン理論がウォルハイムにとって気がかりな対抗理論であったことがうかがわれる。論評の基調は否定的であり，ウォルトン流のごっこ遊び理論が，絵の中にその主題対象を見る経験の実質を適切に捉え切れていないことを批判するものである。とはいえ，批判の趣旨と論拠についての説明は微妙に揺れ動いている。本節では（I）を見てゆく。

『芸術としての絵画』では，ウォルトンへの論評は，描写に関する主要学説を分類・論評している箇所に出てくる。そこに登場するのは，ウォルハイム自身の見解に加えて，幻影説，類似説，ごっこ遊び説，情報説，記号説の総計6つである。それらについての論評として，ウォルハイムは，絵による表象内容に関する理論は，その拠り所を「表象がしかるべき情報と感受性を持つ鑑賞者に引き起こす視覚経験に求める」³⁶ものではなければならないことを力説しているが，上記の6学説のうち，この条件を満たすのは，彼自身の見解に加えて，幻影説と類似説だけだと述べている。ウォルトン流のごっこ遊び説は，絵を見る知覚経験への配慮を欠く見解として，排除される。その理由説明は巻末の注の中で述べられている。

ウォルトンは，絵がこのような効果〔ごっこ遊び的な想像を促す効果〕を持つことが，絵の外観に基づいていなければならないとする点で，記号論の見解とは異なる。しかし，ウォルトンの見解では，絵の外観と，私たちが見ているとごっこ遊び的に想像する事柄との間には，慣習的なつながり（conventional link）が存在するのだとされている。そしてそれゆえに，絵の外観に関わる特別の知覚的能力を引き合いに出すことは要求されていない。それゆえごっ

35 これらに加えて，Wollheim (1980), p. 246には、「記号論的要素と非記号論的要素を組み合わせ，表象をフィクションの特殊事例として扱う興味深い理論」としてウォルトンの論文が紹介されているが，踏み込んだ論評はない。

36 Wollheim (1987), p. 77.

ご遊び理論と私の理論の間には非常に大きな違いがある³⁷。

ここでは、ウォルトンへの不満の中心は、それが、絵の描写内容を理解する根拠を、「絵の外観に関わる特別の知覚」ではなく、外観と描写内容のあいだの「慣習的なつながり」に求めている、という点にある。ウォルハイムの理解では、ごっこ遊び説では、平面としての絵の知覚という要素は考慮されているが、描写内容にかかわる特殊な知覚の存在は認められていない。この点での落差をさらに強調するため、ウォルハイムは続けて、ブリューゲルの絵《干し草の収穫》を例に補説している。

この違いが表面化する一つの仕方として、干し草作りの絵を前にして発話される文「私には農夫が見える (I see peasants)」と文「そこに農夫がいる (There are peasants there)」は、ウォルトンの考えでは、同様の分析を必要とし、それらどちらもがごっこ遊びの一コマとされるが、私は、前者の文は本物の知覚判断の表明だとみなす。それは私が眼前の絵の中に農夫を見ているという事実を省略的に報告しているのである³⁸。

ウォルハイムの理解では、絵に描かれたとある農村の農夫たちの姿を見ての発言として考えるならば、最初の文が述べているような知覚の事実は現に文字通りの意味で成り立っている。しかし、現実には眼前には農夫はおらず、農夫を描いた絵があるだけなので、二番目の文「そこに農夫がいる」については、額面通りに真であるとは主張されていない。他方、ウォルトン理論では、どちらの例文もごっこ遊び的な発言として分析される。それらは、私が視覚的ごっこ遊びの中で、絵に目を向けつつ、そこにしているかのように想像している内容を述べているのだと。しかし、そのような分析は、ウォルハイムの側からは、絵の内容を「見る」という独自の知覚作用（《の中に見ること》）の存在を否定し、それを「慣習的なもの」に準拠した想像に還元するものとして、批判されるわけである。

以上のウォルハイムの議論については二つの批判的コメントを付しておかなければならない。第一は、ウォルトン理論がある種の慣習的な要素に依拠しているという点の当否についてであり、第二は、ウォルトンが描写内容に関わる特殊な知覚を否定しているという点についてである。どちらについても、二人の論客の間には大きな食い違いがある。以下、それらを順次見てゆこう。

第一点について、ウォルトンはこんなふうに応答している³⁹。ウォルハイムが「慣習的なつながり」と呼んだのはおそらく、ごっこ遊びの規則に該当する「生成の原理」⁴⁰のことだが、それ

37 Wollheim (1987), p. 361. n.21. [] 内は筆者の補足。

38 Wollheim (1987), p. 361. n. 21.

39 論文「描写、知覚、想像」の第4節冒頭 (Walton (2008d), pp. 152-153).

40 Cf. Walton (1990), p. 38 [邦訳書39頁], pp. 40-41 [41-42頁].

は「の中に見る」経験の知覚性を損なうような意味での慣習ではない。また、生成の原理に準ずる要因は、ウォルハイム自身の理論の中でも、「正しさの規準」という呼び名の下で織り込まれているから、一方的にウォルトンを批判するのはおかしい。——以上の応答は基本的に正しいと考えるが、その趣旨についてはもう少し言葉を費やしておく必要がある。

例えば、空の雲の模様が羊の群れに見えるような場合、空の雲を見る経験がきっかけとなって、それが羊の群れを見る経験であるかのような想像が促されることがあるかもしれない。そのような想像に従事する人が、他の人に「ほら、羊の群れだ」と話しかけ、他人もそのような想像に同調するならば、少なくともそのサークルの内部では、「空にこれこれの形の雲を見ることは、羊を見ることと見なすべし」とでも言い表せるようなごっこ遊びの規則が共有されたことになるだろう。そして、その規則を踏まえた視覚のごっこ遊びの中では、一定の形の雲はすなわち羊である。

しかし、「ほら、羊の群れだ」と話しかけられた相手は、「いや、あれはイワシの群れだ」と言い返すかもしれない。そして、もしもその相手方の発言に同調する人がほかにもいれば、それはそれで一定の視覚のごっこ遊びサークルが形成されるかもしれない。

では結局のところ、問題の雲は何を表して（表象して）いるのか、という問いに対しては、一意的な答えは難しい。それはある人には羊であり、ある人には魚群であり、さらに別の人には別のものである。あるものがいわば正解として一定の表象内容を持つためには、それを小道具とした視覚のごっこ遊びにおいてどのような想像を営むべきかについて、一定の共通理解が広く共有されている必要がある。多くの場合には、そうした共通理解を形成する一番重要な要因は作者の意図であるが、それとは別の要因が大きな役割を果たす場合もある。

こうした共通理解の形成過程の細部にいま立ち入る必要はない。さしあたり重要なのは、絵の表象内容を確定するためには、それがどのように見えるかという視覚的な要素だけでなく、それを取り巻く社会的了解事項にも配慮する必要があるということである。ウォルトン理論では、その種の要素は、「生成原理」⁴¹という呼び名で総括されている。それは、ごっこ遊びの規則と言い換えてもよいが、その内容は、必ずしも常に整然とした命題の形に整理できるとは限らないし、規則として意識されることさえないかもしれない。

ここで先ほどのウォルハイムの批判に戻ろう。その批判は、いましがたの「生成原理」に類する要素を、視覚的なごっこ遊びの「知覚」としての性格を損なうものとして断罪している。しかし、上の例を見れば分かるように、この種の原理の役割は、言葉の場合の慣習的規約の役割とは大きく異なる。言葉の場合ならば、私たちはまず平面的な形状としての語形を知覚したうえで、それと関わる慣習を踏まえてメッセージを解説する。当然ながら、準拠する慣習が変われば同じ語形であっても解説されるメッセージは変わることになる。よく知られているように、かつてネルソン・グッドマンは、そうした事情を絵画の場合にもそのまま当てはめて、次のように主張した。

41 Walton (1990) の第 I 部を参照。

ほとんどすべての絵が、ほとんどどんなものをも描写しうる。つまり、絵と対象があれば、通常は、その絵がその対象を描写することになるような描写体系、対応づけの方式が存在する⁴²。

しかし、いま問題となっている状況は、グッドマン流の慣習による解説の事例ではない。つまり、壁の染みの形や画布上の絵の具の配置が単に平面的な形状として見られたうえで、慣習に照らしてその解説が試みられているわけではない。むしろ、壁の染みや画布上の絵の具の配置が一定の主題対象を見ているかのような想像をすでに引き起こしているという状況の中で、それぞれの反応が表象としてどの程度の安定性を持つかを定める要因として慣習的な要素（生成原理）が参照されているのである。同じく慣習とはいっても、表象におけるその役割は異なっている。

さらに、こうした補完的要素は、「正しさの規準 (standard of correctness)」⁴³という言い方で、ウォルハイムの理論の中にも登場していることを忘れてはならない。彼によれば、例えば空の雲には、それが何を表象しているかという問いへの正解を決める規準がないが、絵画の場合には、作者の意図が規準となって表象内容が確定され、さらに、写真画像の場合には、被写体との因果関係が、そこに何が写っているかを定める規準になるのだという。もちろんウォルハイムは、こうした規準の介在によって、雲や絵や写真を見る経験の視覚性が損なわれるとは考えていない。しかし、それならば、同じ理由から、ウォルトンの言う「生成原理」が見る経験の視覚性を損なうと考えるべきではないのである。

次に第二点に話を進めよう。それは、ウォルトンの理論が、主題対象を見る経験に該当するような、「絵の外観に関わる特別の知覚」の存在を認めていない点を不服とする批判である。結論から言えば、この批判は、一面で当たっているが、的の中心を射たものとはなっていない。そのことを正しく評価するには、あらためて問題状況を確認しておく必要がある。

一方のウォルハイムは、絵のもとにその主題対象を見ることが、正真正銘の「見る」経験であることを繰り返し力説している。しかし同時に、それが絵の表面を見るときの場合の「見る」とは性格が異なることも、承知している。「の中に見る」経験の場合、見るとはいいながら、目の前に主題対象は存在していない⁴⁴。主題対象を見ることは不在の対象を見ることである。しかし、不在の対象を見ることなどそもそもありうるのかどうか。それはどのような意味での「見る」なのか。こうした問いに対するウォルハイムの回答が、先の「二重性」という特徴づけであり、また、それが二つの側面を伴う独特な単一的経験だという主張だった。

42 Goodman (1972), p. 38 [邦訳書40頁].

43 Wollheim (1980), p. 205f. [邦訳書211頁以下]

44 先ほどのウォルトンへのコメントでも、「目の前に農夫（主題対象）がいる」という命題が真ではないことが認められていた。Wollheim (1987), p. 361, n. 21.

ウォルトンの議論は、こうしたウォルハイムの主張が、絵に固有の「見る」の特徴づけとして不十分だという認識から出発し、ごっこ遊びの概念を用いてその掘り下げを試みたものである。ウォルトンにとっての解明課題は、眼前に主題対象が存在していない状況において、なおかつ「～を見る」という言い方が正しいということの意味であり、それに対する回答が、先ほどの視覚的ごっこ遊びの理論である。

この回答について注意が必要なのは、それが、主題対象を「見る」という言い方の適用条件を説明するにあたり、この言い方に正確に対応する特殊な知覚作用を指定するものとはなっていないことである。ウォルトンが与えている視覚的ごっこ遊びの記述に登場するのは、一つには、絵の表面の形状を見る経験であり、もう一つには、その経験を主題対象を見る経験であるかのように想像することを是とするごっこ遊びの文脈であり、さらには、絵の表面を見る経験と主題対象を見ているかのように想像する経験との間の因果関係である。ウォルトン理論では、これらとは別に、さらに加えて主題対象を「見る」経験が登場することはない。その点だけに限れば、ウォルトン理論が「絵の外観に関わる特別の知覚」の存在を認めていないというウォルハイムの言い分には一理ある。

しかし、その批判はウォルトンの中心論点を素通りしている。確かにウォルトンは、主題対象を現実に「見る」経験の存在は認めていない。しかし、私たちが主題対象を「見る」と語っているような事例を理解する上では、そのような現実の経験は必要ない、というのがウォルトンの見解だった。絵の表面を見る経験を起点に、主題対象を見ているかのような想像を結果として引き起こすような因果関係が人々の間で共有されている限り、そのサークル内では、主題対象を「見る」と語ることが真理（但し虚構的な真理）とみなされる、というのが彼の考えだった。

ウォルハイムから見れば、こうした説明は問題のすり替え、あるいは不当な還元説に映ったのかもしれない。しかし、彼は、それが不当だと考えるべき理由を示したわけではない。あえて言えば、彼が行っているのは、ブリューゲルの干し草作りの絵について、「私には農夫が見える」という発言は真だ、と力説することである。しかし、その発言は、ウォルトン理論に照らしても正しい（虚構的に真なる）発言なのである。

結局、両者の議論は真っ向から対面しないまますれ違っているように思われる。

5 ウォルハイムからの批判（Ⅱ）

次に、論文「画像表象について」(Wollheim (2001)) に目を向けよう。そこでは、ウォルハイムは、絵を見る経験に関するウォルトンの見解を、「想像」概念を援用する見解の洗練された形態として位置付け、かつ批判している。

ウォルハイムがその種の見解の単純な形態とみなすのは、絵を見る経験を、平面を見る知覚経験と、主題対象の様子を心の内に視覚的に思い浮かべるような想像経験とが共存すること、とし

て捉えるような見解である。そのような見解の不備には既に触れた (第3節)。ウォルハイムの説明では、それが不適切なのは、この場合に、見られている絵と、想像されている内容との間に、緊密なつながりが見いだされないためである。それはたまたま絵を見る経験に付随しているだけであって、絵の内容とは言えない⁴⁵。

ウォルハイムは、ウォルトンの立場を正当にもこうした単純な想像説からは区別して、次のように特徴づけている。

私は絵の表面を見、ある顔を見ていると想像し、しかも、その表面を見ている私の経験が、ある顔を見る経験なのだと思像するのである。さらに、表面に関する真実の経験と、顔に関する想像上の経験とは、どちらも知覚的であり、ウォルトンの言い方では「単一の経験」を形成している。かくして二重性が成り立つ⁴⁶。

ウォルハイムは、ウォルトンの立場をこのように捉えた上で、その中心部分に疑問を投げかける。つまり、彼が問題にするのは、「ウォルトンの企ての中心部分である、ある知覚経験を別の知覚経験であると想像するというのを、どうすれば理解できるのか」である。ウォルハイムはこの疑問により特定の形を与えるため、さらに次のように反問している。

そのような想像がうまくいった場合、元の経験はいかにしてその内容を維持するのだろうか。というのも、もしも私が、絵の表面を見る経験を、何か他の経験であるというふうによく想像できるのだとしたら、そのときに、元々の表面を見る経験には何も残されていないことになりはしないだろうか。他方、もしも私がその時にも表面を見続けているのだとすれば、あるいは、表面を見る経験が内容を維持しているのだとすれば、今度は、それが顔を見る経験だという想像がどうしてうまくいくのだろうか⁴⁷。

ウォルハイムは続けて、この問いかけの趣旨について注釈を付している。それによれば、この反問で想定されている困難は、単に何かをそれとは別の何かであると想像することにあるのではなく、ある知覚経験を、それとは別の知覚経験であるかのように想像するという点にあるのだ、と。彼が言うには、

私が手と腕を断続的に不規則に動かして、自分が有名楽団を指揮している想像をすることには、何も根本的な困難がないことは明らかである。また、それを言うならば、私が昔の敵を

45 Wollheim (2001), p. 24.

46 Wollheim (2001), p. 25.

47 Wollheim (2001), p. 25.

凝視して、熱視線で焼き殺しているかのように想像することにも。第一の事例ではどちらの経験〔手と腕を動かす経験と、有名楽団を指揮する経験〕も知覚的でなく、第二の事例では、一方〔昔の敵を凝視する経験〕だけが知覚的である⁴⁸。

他方、ウォルトン流の視覚的ごっこ遊びの場合には、自分がある平面を見ているという知覚経験を、その内容ともども維持したまま、それとは別の内容（例えば顔）を見る知覚経験であるかのように想像することが求められている。しかし、そのようなことなどありうべくもない、というのがウォルハイムの診断である。

以上を要約すれば、ウォルハイムの批判は、絵を見る経験を視覚的ごっこ遊びに基づいて説明しようとするウォルハイムの試みが成功していないと考えるべき論拠として、(i) ウォルトン理論の中心にある視覚的なごっこ遊びの概念が十分に理解可能な形で説明されていない点を指摘するものであり、さらに、(ii) その不十分さを際立たせるために、絵の表面を見る経験の内容が、主題対象を見るさいの視覚的ごっこ遊びにおいてどのような形を帯びることになるのかを問い糺すものである。

これらの批判は、半頁ほどの小さなスペースで展開されていることもあり、批判の要点を捉えるのがなかなか難しい。ウォルトンの側での応答も、反論というよりも、戸惑いの表明の色合いが濃い。

私は、このこと〔ある知覚経験を別の知覚経験だと想像すること〕に何か問題があるとは思わない。ある知覚経験がある内容を持つと想像しながら、同時に、それが現実には異なる内容を持つと認識することが、どうして、ある対象が実際に持っているのとは異なる性質を持つと（例えば泥団子がパイだと）想像することより以上に困難だと見なされなければならないのか⁴⁹。

比較の対象として、ウォルトンは音楽の類例を挙げている。絵画平面を見ながら、それが例えば人の顔を見る経験だと想像することは、モーツァルト『魔笛』の中でフルート奏者が奏でた音を聞きながら、それをパバゲーノが木製の笛を吹く音だと想像するのと同じようなことであり、何も困難はない、というのがウォルトンの言い分である。

さらに言えば、平面を見る経験の内容と主題対象を見る経験の内容とがいかに両立するかという問いかけは、ウォルトンよりもむしろウォルハイムにとってより厄介な問題であるように思われる。ウォルハイムは、絵を見る経験を、絵の表面を見る経験に対応する側面と、主題対象を見る経験に対応する側面とを備えた二重性を持った単一の経験なのだと主張したわけだが、そうし

48 Wollheim (2001), p. 25. [] 内は筆者の補足。

49 Walton (2008d), p.154. [] 内は筆者の補足。

た二重性の由来について、さらに踏み込んだ説明までは与えていない。ウォルトンの理論はその欠を補うものとして提案されたのだった。そのことを考えるならば、批判の(ii)は、むしろウォルハイム自身に向けられていると見たほうが適切である⁵⁰。

以上の事情を踏まえれば、論文「画像表象について」での議論は、ウォルトン批判として決して成功しているとは言い難い。とはいえ、適切に展開できているかどうかは別として、ウォルハイムは、ウォルトン流の視覚的なごっこ遊びの概念への疑念を、最後まで払拭することがなかった。次にその疑念の最終形態を見ることとしよう。

6 ウォルハイムからの批判(Ⅲ)

ウォルトンとの論争に関するウォルハイム側の最後の言葉に当たるのは、論文「表象的な絵画を真に視覚的ならしめるものは何か」(Wollheim (2003))での論述である。そこでは、ウォルトンの議論を取り巻く問題状況が三点に整理されている。いずれも、ウォルトンのいう視覚的なごっこ遊びの中に、主題対象の「知覚」に該当するような構成要素が含まれていないことを指摘するものであり、そのことを通じて、視覚的なごっこ遊びの概念が、絵の主題対象を見る経験への解明項として不適切であることを論じようとするものである。

第一点はこんな風に述べられる。

……仮に、ウォルトンにとって、適切な経験が全体として知覚的なのだとしても、そのことは、その経験が持つ明白に知覚的な要素のおかげではありえない。なぜなら、その経験が持つ知覚的な成分は、鑑賞者が目の前の彩色表面を見るということにすぎないからである⁵¹。

これは、ウォルトンの言う視覚的なごっこ遊びにその構成要素として含まれている知覚経験が、ウォルトンの説明では、絵画表面の平面的な形状の知覚だけだ、という事情を再確認するものである。これは、問題なく正しい指摘である。

続く第二点は、ウォルトンが視覚的なごっこ遊びのもう一つの成分として指摘している経験に注目し、それもまた、視覚的なごっこ遊びの全体に知覚経験の性格をもたらすことはできないと主張するものである。問題とされる成分経験とは、《絵画平面の知覚経験があたかも主題対象の知覚であるかのように想像される》という経験である。ウォルハイムによれば、この種の想像は、「二重性」の説明にはなっても、絵を見る経験の「知覚性」を保証しない。彼は、残されている疑問点を、マティスの手になるマティス夫人の肖像画を例に、次のように定式化している。

50 Walton (2008d), p. 155.

51 Wollheim (2003), p. 145.

はたして、マティスの画布に目を向けながら、そのことがマティス夫人その人に目を向けることであるかのように想像している人には、マティス夫人に関する知覚経験が与えられるのだろうか⁵²。

マティス作の《マティス夫人の肖像》を見ることは、ウォルハイムからすれば、ある特殊な意味においてマティス夫人を「見る」ことであり、その知覚の事実こそ、「の中に見る」経験の実質がある。しかし、ウォルトンの記述に従って、マティスの絵を見ながら、それがマティス夫人を見ていることであるかのように想像したとしても、それによってマティス夫人を「見た」ことになるとは言えない、というのがウォルハイムの言い分である⁵³。

この第二の指摘も、一面では全く正しい。たしかに、見たと想像すれば見たことになるというのはおかしい。しかし、ウォルトン理論では、そのような想像は、それが当の絵を見る経験と緊密な因果関係を持ち、かつ一定範囲の人々の間でその想像が共有されている場合には、絵の主題対象を見るという虚構的な真理を生成する。目下の第二の論点は、そうしたウォルトン理論の本体への踏み込んだ批判にまではなっていない。

ウォルハイムがウォルトン理論により踏み込んで検討を加える最後の機会となったのが、次の第三の議論である。彼はそこでこんな問いを投げかける。すなわち、絵の表面の知覚のことを主題対象の知覚であるかのように想像する、というごっこ遊び的な想像の構造を持ちつつ、全体として知覚の性格を持ち、かつ、絵の描写内容を理解する拠り所となる、そのような想像なるものが、そもそもありうるのかどうか。

第三に、何かこれとは別の形の想像が存在するのだろうか。つまり、(1)ウォルトンの望み通り、ある知覚経験を別の知覚経験であるかのように想像することであり、かつ(2)全体的な知覚性を保証するものと考えられ、さらに(3)画像表象にふさわしい[その内容を理解する拠り所となるのにふさわしい]経験の役割を果たすことができる、そのような想像が⁵⁴。

ウォルハイムの理解では、ウォルトンはまさにこの種の想像作用を想定しているのだが、しかし、そのような想像作用など実際には存在しない。そして、ウォルハイムは、そのように考えるべき論拠として、ウォルトンが挙げた聴覚的な類例の一つについて論評している。

52 Wollheim (2003), pp. 146.

53 以上の第二点と関連する補足として、ウォルハイムは、このあたかも主題対象を見ているかのような想像が、「視覚化」とでも呼ぶべき「明らかに知覚的であるような形の想像」だという見方にも触れて、その二つの問題点を確認している。第一に、この種の想像は単純な平面の知覚とは共存することができないため、二重性の説明が苦しくなる。(この点は1998年の批判と重なる。)第二に、ウォルトンはこうした見方を採用していない。

54 Wollheim (2003), p. 146. []内は筆者の補足。

取り上げられているのは、先ほどの、モーツァルト『魔笛』の演奏を聴くときに、オーケストラのフルート奏者の演奏が、(劇中の) パパゲーノの粗末な笛での演奏として聞かれる、という事例である⁵⁵。ウォルトン自身は、この事例を絵画の場合に準じた「の中に聞く」の事例と見なしているのだが、ウォルハイムの方は、この事例を次のように記述している。

……私はフルート奏者に耳を傾ける時に聞こえる音が、パパゲーノの出した音である[と同一である]と想像し、そのことに基づいて、フルート奏者が出した音を、パパゲーノが出した音として聞く⁵⁶。

ウォルハイムによれば、この事例では、現実に存在し、現実に聞くことができるのは、フルート奏者の音だけである。しかし、それがパパゲーノの出した音と同一だと想像することで、私たちは、フルート奏者が出した音をパパゲーノの出した音として聞くことができる。そしてその意味では、私たちはパパゲーノの出した音(現実には存在しない音)を聴くことができる、というわけである。

ウォルハイムの理解では、ウォルトンは、これと同じことが絵画の場合にも成り立つと考えているのだという。つまり、絵を見る人は、(i) 絵の表面と主題対象とが同一だと想像しているのであり、かつその想像に基づいて、(ii) 絵の表面を見ることを、主題対象を見ることに他ならないと受け止めているのである、と。

さて、ウォルハイムは、こうした記述を、音楽や演劇については妥当なものとして受け入れている。しかし、彼はまた、同様の記述を絵画の事例に当てはめることについては、強く反論している。彼によれば、絵の場合には、私たちは(i) 絵の表面がその主題対象と同一だと想像するようなことはない。また、(ii) 絵の表面を主題対象として見るというようなこともない。むしろ私たちは、絵の表面と主題対象をどちらも(異なる意味ではあるが)「見る」のであり、その両者を同時に見ることができるということこそがまさに「二重性」の意味に他ならないというのである。

なぜなら、……私たちは[画像]表象を見る時、マークされた表面と表象された対象の間の同一性を想像することはないし、……また表象された対象は、……現実に知覚されるからである⁵⁷。

以上のウォルハイムの議論のうち、音楽や演劇に関わる部分については、非常に重要な素材とはいえ、本格的な検討は別の機会に譲らざるを得ない。ここでは、絵の事例に焦点を絞り、ウォ

55 Wollheim (2003), p. 146.

56 Wollheim (2003), p. 146. [] 内は筆者の補足。

57 Wollheim (2003), p. 146. [] 内は筆者の補足。

ルハイムのウォルトン批判の当否に考察を限定する。

この点について、「当」か「否」かと問われれば、答えが「否」であることは明らかである。第3節で確認したように、ウォルトン理論では、画像表象の基盤となっているのは、次のような想像である。

(a) 絵の表面を見ることが、主題対象を見ることと同一であるかのような想像

この点はウォルハイムも正しく理解している。しかし、ウォルハイムは加えて、その種のごっこ遊び的な想像の基礎を、ウォルトンが、次のような想像に求めているのだと想定している。

(b) 絵の表面と主題対象とが同一であるかのような想像

そのように見立てた上で、現実には私たちは、絵を見る時に、(b)のような想像など行っていないというのが目下の批判の骨子である。しかし、先に第3節で見たように、ウォルトンの画像表象論の中には、絵を見る経験に(b)のような想像が付随するという主張は出てこない。また、ごっこ遊び論の根幹をなす(a)の類の想像が、(b)の類の想像に基づくものだという主張も、ウォルトンの論述には見当たらない。それゆえ、ウォルハイムによる批判は、藁人形を相手にしている印象を否みがたい。

もちろん、このことをもってウォルハイムによる批判の意義を全面否定することはできない。ウォルハイムが一連の批判の中でこだわり続けているように見えるのは、(a)のような想像が、絵を見る経験の中でどのような裏付けを持つのかという点であり、また特に、それがどのような意味において「知覚」経験としての性格を帯びることができるのか、という問いかけである。この問いかけ自体は、ウォルトン理論の評価にとって依然として重要な着眼点だと思われる。絵の表面の知覚を主題対象の知覚であるかのような想像が、絵を見る経験の中でどのような裏付けを持つのか。また、いかにしてそれは、経験全体が(虚構的な意味においてであれ)「見る」経験であることを保証してくれるのか。

第3節で見たように、ウォルトン自身は、この点の説明を、表面の知覚と主題対象を見ている想像との間の因果関係に求めていた。私たちは、絵の表面に目を向けるや、気がつくときと多様な主題対象を見ているかのような想像を促されているのであり、そうした被指定性の点で、絵を見る経験は、ごっこ遊びとは言っても空想的な想像の性格を免れているのだ、と。このように、画像表象の基盤となっている想像が、想像という言葉から連想されがちな自由気ままな空想ではなく、絵そのものの形状によって指定された拘束度の高い想像だという事情については、節を改めてもう少し掘り下げておきたいと思う。しかし、残念ながらウォルハイム自身は、絵の表面を見る知覚経験と、ごっこ遊び的な想像経験との間の因果関係をめぐるウォルトンの考察には、応答して

いない。それが見落としによるか、論外という評価の結果であるかは不明である。ともあれ、そのことが、両者の論争にすれ違いの印象を与えていることは間違いない。

7 視覚的なごっこ遊び再論

本稿では、絵を見る経験の本性に関して、ウォルハイムとウォルトンの議論を手掛かりに問題状況の確認を行ってきた。見てきたように、両者の対立は多分にすれ違いの様相を呈している。

一方のウォルハイムは、絵を見る経験を「の中に見ること」と呼んだうえで、その特質を、絵の表面と主題対象の双方に関わる「二重性」を持った現実の、しかし特殊な知覚作用として特徴づけた。ウォルトンとの論争の中でも、ウォルハイム側の最終的なよりどころは、この特殊な知覚作用が現実中存在するという強い確信にあった。彼はそれを経験の事実と考えていたのかもしれない。それは独断とも言えるが、しかしまた、少なからぬ人々が共鳴する素朴な直観でもあるように思われる。

他方、ウォルトンの関心はそれとは方向性が異なる。ウォルトンが関心を寄せているのは、例えば馬の絵が一定の文脈では端的に「馬」と呼ばれ、その絵を見ることが「馬を見る」ことでありうるという事実である。こうした事実（虚構的真理）を成り立たせているのはどのような事情なのかというのがウォルトンの関心事であり、それに答えるのが視覚的なごっこ遊びの理論だった。ウォルトンの理解では、ごっこ遊び理論に基づく虚構的真理の解明は、ウォルハイムが「二重性」の概念で説明しようとした「の中に見る」経験の本性についてより踏み込んだ理解を与え、ウォルハイム理論を補完するものである。しかし、あいにくウォルハイムの側は、この虚構的真理の理論を、「の中に見る」経験に関する分析案としては拒み続けた。ウォルハイムは、視覚的なごっこ遊びについての考察が、絵の主題対象を見るということに関する私たちの素朴ながら根強い直観について、十分な説明を与えてくれるとは考えなかった。

最終的に、両者の間の論争では、絵のもとに主題対象を見る経験を、現実の知覚として捉えるか、虚構的な真理と考えるかという方向性の違いばかりが際立ち、理論的に満足いく着地点を見いだせないままに終わったように見受けられる。しかし、はたして、現実の知覚か虚構的真理かという二項対立は架橋しがたいものだったのかどうか。はたして、虚構の理論の枠組みを維持しながら、その内部で知覚的な事実の現実性についても配慮するような理論構成はあり得ないのかどうか。論争の中で問われていたのはその点であるはずだった。

現実の論争は物別れに終わったが、しかし、私見では、その争点については、もう一步、考察を掘り下げる余地があるように思われる。その手掛かりとなるのは、ウォルトンの次の発言である。(それはおそらく本件に関するウォルトンの最後の言葉にあたる。)

ウォルハイムが強調したがっているのは、鑑賞者の経験が本物 (genuin) の視覚経験だとい

う点である。描写の視覚性の根拠は、その本物の視覚経験にあるのであって、想像上の視覚経験やごっこ遊び的な視覚経験にあるのではない、というのである。しかし、視覚経験が本物だという事実は少しも脅かされてはいないのだ。少なくとも、私の説明ではそうである。なぜなら、たしかに私は、鑑賞者の経験が文字通りの意味で農夫を見る経験であることは否定するが、それが依然として現実の視覚経験 (an actual visual experience) であることは一時たりとも否定していないからである。単に想像されているだけなのは、この視覚経験が農夫を対象にしているという点である⁵⁸。(傍点は原著のイタリック体。下線は筆者による。)

ここでのウォルトンの論旨はあまり分かりやすくはないに違いない。一方で彼は、絵の中の農夫を「見る」ことが、本物の「見る」ことではなく、あくまで虚構的真理だと主張しているわけだが、同時に、その虚構的真理が成り立つための条件として、農夫に関する「本物の視覚経験」が成り立つことを主張している。しかし、絵の中の農夫を「見る」経験が本物の「見る」であることを否定しながら、それが「本物の視覚経験」であることを認めるとするのは、どういうことなのか。そのあたりの事情の分かりにくさもあってか、対するウォルハイムの側は、ここでのウォルトンの論点に反応した形跡はない。しかし、私見では、この論点は、ウォルトン流のごっこ遊び理論を絵の場合に当てはめるといふことの正確な意味を理解する上では、極めて重要である。そして、その理解は、ごっこ遊び説がウォルハイム流の知覚説の洞察をどこまで救い上げうるかを見極める上でも欠かせない。そこで以下、本稿の最後の課題として、目下の論点の趣旨について解明を試みる。

まずは、絵の場合のごっこ遊び的な想像の特質を際立たせるために、言語表象の場合と比較してみよう。

例えば三島の『金閣寺』を読む人は、一方では三島が書いた文章を現実に読みつつ、同時に、それが架空の若い僧侶の手記を読む行為であるかのように想像している。この場合の想像は、現実には反することを承知の上で、しかし若い僧侶の手記を読んでいると思っていることにしよう、というまさにメイクビリープ的な想像である。そして、そのような想像は、何より、読まれている文章の内容についての理解を通じて指定されている。

他方、絵を見る場合はどうか。この場合、上記の三島の文章を読む行為に相当するのは、絵の表面の色や線の配置を見る行為である。それを受けてごっこ遊び的な想像が行われるわけだが、この場合、ごっこ遊び的な想像の内容を指定するのは、絵の表面の平面的な形状それ自体についての理解ではないし、慣習に基づくその解読でもない。むしろ、第3節で紹介したウォルトンの説明では、両者をつなぐのは因果関係である⁵⁹。つまり、絵の表面に目を向けたときに、それに

58 Walton (2008d), pp. 145-146.

59 後述 (第8節) するように、画像表象の理解には、単に絵に目を向けるだけで自動的に生じる想像だけでなく、

対する「自動的な反応」として、一定の主題対象を見ているかのような想像が成立するというのである。この点を最もストレートに述べているのは1992年初出の論文「の中に見ることと虚構的に見ること」である。

絵の中に馬を見る人の想像は、思案によるもの (deliberate) ではなく、画布上のマークへの自動的な反応 (spontaneous response) である。見る人は、絵を見ながら自分が一定の想像を行っていることに気付くのだ。そして、見る人は、絵を見るのに加えてこの自然な想像に従事しているとみなすより、知覚的かつ想像的な単一の経験を味わっているとみなすほうがよい。見る人の絵画知覚は想像に彩られているのである⁶⁰。

この場合の想像は、先の小説の事例と比べると、内容の理解を踏まえた上で《……であると思ふことにする》というメイクビリーブ的な想像の性格は薄い。ここで問題となっているのはむしろ、一定の条件下では一定の認知的反応が惹起される、という認知的な反応パターンだと見るほうがしっくりとくる。私たちが絵に目を向けたときに起こるこの種の認知過程は、意識レベルでの反応というより、大方は意識下のものであって、私たちはその結果を意識するだけである。例えば風景画なり人物画なりを見る時、私たちは結果として、自分が一定の風景や一定の風貌の人物を見ているときのような状態に導かれていることに気づく。しかし、現実には絵の平らな表面があるだけで、風景や人物は不在であることも認識されているため、素朴心理学的な態度の分類でいえば、私たちは、信念や知覚ではなく、想像しているのだという理屈になる。しかし、この意味での想像の実質は、様々な可能性に思いを巡らせることではなく、むしろ、現実に様々な事物を見る時に起こるような認知過程が現に自分に起こっていることの体験なのである。

さて、ここまでくれば、本節の最初の引用で触れた「現実の視覚経験」の趣旨も明瞭であろう。ウォルトンは一方で、私たちが絵を見て、そこに主題対象の姿を「見る」と思う時、その「見る」が、対象を眼前にした場合のような現実の「見る」ではないことを認めるが、同時にまた、その時に起こっていることが、随意に自由な想像を巡らせるような経験ではなく、むしろ主題対象を現実に見る場合に生じるであろう経験と多かれ少なかれ類似した経験であるとも考えていた。それは、想像の一種に分類されてはいるが、多分に視覚的な過程である。それが、先の「現実の視覚経験」の実質である。

ウォルトンはこの種の経験についてあまり多くは語っていない。しかし、それがウォルトン理論において果たす役割を正確に理解しようとする際には、彼が類似説の是非について行っている論述が参考になる。一般に類似説と呼ばれるのは、絵による描写の実質を、絵の外観と主題対象

画像を取り巻く歴史的・地域的な文化的背景とのつながりも重要になってくるが、その種の慣習的要因の正確な位置づけの検討は別の機会に譲らざるを得ない。

60 Walton (2008c), pp.137-138.

の外観の間の類似関係に求める考え方である。それに対してはゴンブリッチやグッドマン、ウォルハイムら多くの論客から強い批判が向けられており、ウォルトンもそうした批判的論調を引き継いでいる。しかし、その一方で、ウォルトンは、別の形での類似説については好意的なコメントを向けている。それは、外観の類似性ではなく、むしろ経験の類似性に定位した形での類似説である。彼はこう述べている。

類似性は、絵を見ることと物を見ることの間、そしてまた、知覚されるものではなく知覚する行為の中に探すほうが良い。……絵の人物や絵の山岳を視覚的に調べることは、大まかに言えば、現実の人物や現実の山岳を視覚的に調べることに似ている⁶¹。

ここにいう「絵を見ること」が、単に平面の知覚ではなく、主題対象を見ているかのような想像と一体化した絵の知覚を指していることは言うまでもない。より明確に、主題対象を見るときに発動するような認知的反応を伴った絵の知覚、と言い換えてもよい。こうした事情が視覚のごっこ遊びにおいて占める位置を簡潔に整理したのが次の発言である。

絵を視覚的に探究することと、絵が描いた事物を視覚的に探究することの間には一定の類比が成り立つのだが、それは次のような知覚的なごっこ遊びと密接に連携している。それは、絵の視覚的探究が、虚構として、事物の視覚的探究であるようなごっこ遊びである⁶²。

ここで、絵の視覚的探究は、もちろん、現実には主題対象の視覚的探究ではない。それは、ウォルハイムが頑強に要求し続けた本物の見るのではなく、あくまで、虚構的な真理としての見ることである。しかし、そうではあるが、両者は互いに類似している。そして、その類似関係の存在自体は、虚構的な真理ではなく、現実の真理である。絵を見る時には、主題対象は面前には存在しないけれども、しかしそれを面前に見る場合と同じような視覚的な認知過程は現に成立しているのである。そもそも絵とは、そのような認知過程を引き起こすべく作られたものでもある。

一般に、絵と呼ばれるものは、言語的記述と比べて、視覚的なごっこ遊びの小道具としてはるかに適している。なぜなら、絵を見ることは、事物を見ることに対して、言語的記述を読むことにはみられないような類似性を持つからである。この類似性のおかげで、絵についての多様な視覚的探究のことを、描き出された事物についての視覚的探究であるかのように鮮やかに想像することが容易になる。それゆえ、それらの想像が指定されるのは自然であり、

61 Walton (1990), p. 302 [邦訳書303頁].

62 Walton (1990), p. 303 [邦訳書303頁].

絵がその種の指定を担う機能を持つのも自然である⁶³。

ここに言われる類似関係の存在が、先ほどの「視覚経験」の存在と重なることは言うまでもない。ウォルトンの理論では、絵の中にその主題対象を見る経験は、現実の「見る」経験ではなく、虚構的な真理にとどまる。しかし、その虚構的真理を支えているのは、主題対象を現実に見る場合と類似した視覚的な認知過程が現に成立しているという事実なのである。ウォルトンにとっては、それが、主題対象を「見る」ということの実質である。

こうしたウォルトンの提案に対して、ウォルハイムの側は最後まで拒絶の姿勢を貫いた。しかし、こうした説明を拒んだ場合に、では不在の主題対象を「見る」という経験の実質をどのように理解するのかという点について、ウォルハイムの側に積極的な説明が用意されているわけではない。この点については、ボールはウォルハイム陣営の側にあるように思われる。

8 おわりに

最後に、本稿の論旨を簡単に振り返るとともに、残された課題を確認しておきたい。

本稿では、画像表象に焦点を絞つつ、ウォルハイムからの批判を手掛かりに、ウォルトンの描写論に関して解明・弁護を試みてきた。ウォルトンの理論は、分析美学における画像表象の理論の中で大きな影響力を揮ってきたウォルハイムの理論を批判的に継承しようとするものであり、ウォルハイムが指摘した絵を見る経験の「二重性」——絵の表面を見ることであると同時に主題対象を見ることでもある——について、ごっこ遊び理論に基づく解明を提案したものである。しかし、その提案は、ウォルハイムが受け入れるところとはならなかった。何より大きな障害と見なされたのは、ごっこ遊び理論が、絵を見る経験が主題対象を「見る」経験でもあるという点について、十分な説明が与えられないという懸念だった。本稿では、この点をめぐる両者の議論について踏み込んだ検討を行うことで、ウォルハイムの懸念が必ずしも当たっていないことを明らかにした。それゆえ、ウォルトン流のごっこ遊び理論は、絵を見る経験の「二重性」の由来を理解するうえで有益な視点でありうる、というのが本稿の結論である。とはいえ、その結論を確認するとともに、ウォルトンの描写論については、さらに考えなければならない重要な課題が残されていることも、認めておかなければならない。

第一には、ウォルトンが視覚的な事例と連続的に捉えている聴覚的な表象の事例について、本稿では踏み込んだ検討を先送りしている。ウォルトンの理論では、画像表象は聴覚的な事例ともどもより一般的な描写 (depiction) の概念に包摂されるのだが⁶⁴、その点の是非の検討については機会を改めねばならない。

63 Walton (1990), p. 304 [邦訳書304頁].

64 Cf. Walton (1990), ch. 8.

第二は、第6節において行った考察——それは何より、絵の表面を見る経験と、主題対象を見ているかのような想像との間の因果関係に関わる——の位置づけに関わる問題である。画像表象の本性を理解する上でこの種の因果関係が重要であることを説く立場は、しばしば「認知主義 (cognitivism)」と呼ばれる⁶⁵。ウォルトンの場合には、そうした認知主義の洞察を実質的に受け入れながら、それをあくまでごっこ遊び理論の枠内に位置づけている。しかし、果たしてそれは後者の枠内に収まるものなのかどうか。この点は、そもそもごっこ遊び理論とは何かという点の意味づけとも関わるものであり、慎重な検討が必要である。

第三に、上記の第二点とも重なるが、絵を見る経験の基盤となっている自然的な因果関係と、絵の表象内容の理解とが、正確にどのような相関関係を持つのかという点について、慎重な吟味が必要である。絵の表面を見る経験と、主題対象を見ているかのような想像の間の因果関係、という言い方は、無造作に受け取れば、次のような誤解を招きかねない。つまり、絵の描写内容は、いかなる文脈情報とも独立に、ただ絵を見さえすれば、そこから結果する想像を通じておのずと理解されるものなのだ、と。しかし、ウォルトンの論述を慎重に読むならば、そこでは、問題の因果関係が、絵を見る人を取り巻く文化的な環境から独立であることは、何ら主張されていない。絵の内容の理解は、本稿で強調したように、絵に目を向ける結果として生じる知覚的想像に大きく依存する点で言語の場合とは対照をなすが、もう一方で、(本稿では踏み込まなかったが、)歴史的・地域的な文化的環境にも大きく拘束される。後者の側面をどのような理論的構図の下で捉えるかという点もまた、今後の重要な検討課題である。

[文献]

- Allen, Richard and Smith, Murray. (eds.), 1997, *Film Theory and Philosophy*, Oxford University Press.
- Feagin, Susan and Maynard, Patrick. (eds.), 1997, *Aesthetics*, Oxford University Press.
- Gombrich, E. H., 1960, *Art and Illusion*, London: Phaidon. [瀬戸慶久訳, 1979年, 『芸術と幻影』, 岩崎美術社.]
- Gombrich, E. H., 1963, *Meditations on a Hobby-Horse and Other Essays on the Theory of Art*, London : Phaidon. [二見史郎他訳, 1994年, 『棒馬考』, 勁草書房.]
- Goodman, N., 1976, *Languages of Art*, Indianapolis: Hackett. [戸澤義夫・松永伸司訳, 2017年, 『芸術の言語』, 慶應義塾大学出版会.]
- Hopkins, Jim. and Savile, Anthony. (eds.), 1992, *Psychoanalysis, Mind and Art: Perspectives on Richard Wollheim*, Oxford UK & Cambridge USA : Blackwell.

65 Cf. Schier (1986), Lopes (1996).

- Lopes, D., 1996, *Understanding Pictures*, Oxford: Clarendon Press.
- Schier, F., 1986, *Deeper into Pictures*, Cambridge University Press.
- Van Gerwen, R., (ed.), 2001, *Richard Wollheim on the Art of Painting*, Cambridge University Press.
- Walton, K. L., 1990, *Mimesis as Make-Believe: On the Foundations of the Representational Arts*, Harvard University Press. [田村均訳, 2016年, 『フィクションとは何か: ごっこ遊びと芸術』, 名古屋大学出版会.]
- , 1997, “Make Believe and the Arts”, in Feagin and Maynard (1997), pp. 288 – 295.
- , 2008a, *Marvelous Images on Values and the Arts*, Oxford University Press.
- , 2008b, “On Pictures and Photographs: Objections Answered”, in Walton (2008a), pp.117 – 132. (originally published in Allen and Smith (1997), pp. 60 – 75.)
- , 2008c, “Seeing-In and Seeing-Fictionally”, in Walton (2008a), pp.133 – 142. (originally published in Hopkins and Savile (1992), pp.281 – 291.)
- , 2008d, “Depiction, Perception, and Imagination: Responses to Richard Wollheim”, in Walton (2008a), pp.143 – 156. (originally published in *Journal of Aesthetics and Art Criticism* 60/1, (2002), pp. 27-35)
- Wollheim, R., 1980, *Art and Its Object, 2nd ed.*, Cambridge University Press. [松尾大訳, 2020年, 『芸術とその対象』, 慶應義塾大学出版会.] (初版1968)
- , 1987, *Painting as an Art*, Princeton University Press.
- , 2001, “On Pictorial Representation”, in Van Gerwen (2001), pp. 13 – 27.
- , 2003, “What Makes A Representational Painting Truly Visual?”, in *Proceedings of the Aristotelian Society, Supplementary Volume 77*, 131 – 47.
- 清塚邦彦, 2010, 「絵を見る経験について: R・ウォルハイムと K・L・ウォルトンの論争を手がかりに」, 『メディアの哲学の構築: 画像の役割の検討を中心として (平成19年度~21年度科学研究費補助金 基盤研究 C 研究成果報告書 研究代表者: 小熊正久)』, 12 – 21.
- , 2017, 『フィクションの哲学 [改訂版]』, 勁草書房.
- , 2021, 「R・ウォルハイムの画像表象論」, 『山形社会文化創造研究科社会文化システムコース紀要』, 第18号, 9 – 35頁.

謝辞 本研究は JSPS 科研費 20K00026 の助成を受けたものです。

K. L. Walton on the Theory of Depiction: Analysis of His Dispute with R. Wollheim

Kunihiko KIYOZUKA

K. L. Walton is one of the leading theorists of analytical aesthetics. He is especially known as the proponent of the Make-Believe Theory: a general theory of representation, covering various types of representational works of art, that relies on the concept of make-believe. In this paper, I will focus on the part of his general theory that is related to the nature of pictorial representation.

In his paper, "Make Believe and the Arts" (1997), Walton compares his theory with its two major antecedents: E. H. Gombrich's Illusion Theory and R. Wollheim's Perceptual Theory. According to Walton, his theory is a development of these theories. In Walton's view, the Illusion Theory evolved into the Make-Believe Theory, and many of the insights of the Perceptual Theory were retained and improved there. But such self-assessment of Walton's was criticized by Wollheim. In this paper, I examine the controversy between Walton and Wollheim on the nature of perceptual experience of pictures.

The heart of the controversy was how we understand the visuality of the experience of seeing various things in pictures. Wollheim asserts that we actually 'see' these things, while Walton insists that it is fictionally true that we see them. I argue that Walton's theory can be defended by elucidating the nature and role of visual experiences which support these fictional truths.